

6 成長ホルモン産生下垂体腺腫を合併した頭蓋咽頭腫の一人

岡田 正康***・米岡有一郎****
藤井 幸彦*

新潟大学脳研究所 脳神経外科学分野*
新潟大学超域学術院/
医学部生化学第二教室**
新潟大学地域医療教育センター・
魚沼基幹病院 脳神経外科***

胎生期の頭蓋咽頭管に由来するとされる頭蓋咽頭腫は、脳腫瘍全国集計調査では5年PFSが69.6%と術後の腫瘍制御が今後も課題の一つである。今回頭蓋咽頭腫に成長ホルモン(GH)産生下垂体腺腫を合併した成人例を経験した。症例は48歳男性。意識障害を呈した水頭症の症状で発症した。頭部CTで第三脳室内に石灰化を伴う占拠性病変と非交通性水頭症の所見を認めた。前医で脳室ドレナージ術を施行され、当院へ転院となった。頭部MRIで第三脳室内の占拠性病変とともに左海綿静脈洞部に弱い造影効果を示す下垂体腺腫の所見を認めた。両腫瘍を摘出のため内視鏡下拡大蝶形骨洞手術を施行した。術後に判明した術前採血ではGH:7.6 (ng/ml), IGF-1:648 (ng/ml), 先端巨大症様顔貌、摘出標本の病理診断を含め、GH産生下垂体腺腫と診断した。一方、第三脳室内腫瘍の病理はadamantinomatous typeの頭蓋咽頭腫であった。GHは腫瘍増生に関連があり、GH産生下垂体腺腫を合併した本症例では両腫瘍の再発に注意が必要である。

7 妊娠中に著明に増大した prolactinoma

田村 哲郎・富川 勝・澁谷 航平
吉田 至誠

県立中央病院 脳神経外科

【対象】2006-2015年までの10年間に初回手術を受けたGH産生下垂体腺腫、連続81症例(前期35後期46)。

【結果】後期症例でGH<5.0ng/ml未満での発見(11.4% vs. 26.1%) heel pad<22.0mmでの

発見(23.3% vs. 39.0%)例が増加。DM(38.2% vs. 30.2%) HT 37.1% vs. 27.3%)は減少。微小腺腫5例は全て後期症例。画像診断先行例(14.7% vs. 30.4%)、本疾患に無関係の主訴で各科を受診した症例が増加(26.5% vs. 43.5%)。IGF-1(834 vs. 594, p<0.001), Z-score(年齢SD)(8.6 vs. 6.5, p<0.001)は後期で有意に低下。全期間を通じてDM群24例/境界型以下群53例の間でGH, IGF-1, Z-scoreに有意差が見られた。高血圧25例/非高血圧53例の間には有意差なし。

【考察】近年における本疾患の早期発見傾向が確認された。MRIで偶発腫として発見される例が増加した一方、無関係の主訴で来院した症例が各科医師に拾い上げられている実態も窺われた。IGF-1およびZ-scoreは後半症例で有意に低値であった。全期間を通じて耐糖能とGH, IGF-1, Z-scoreはよく相関しDM症例の減少という観察結果と矛盾しなかった。

8 内視鏡下経鼻下垂体腺腫摘出後の下垂体前葉機能回復について

米岡有一郎・大野 秀子・岡田 正康
藤井 幸彦

新潟大学脳研究所 脳神経外科学

Prolactinomaの患者の治療にはドパミン作動薬で治療することが多いが、妊娠すると休業することが一般的である。その場合に妊娠中に腫瘍が増大することがあり、典型例を経験したので報告する。

症例は27歳で自然分娩したが、その妊娠中から出産まで左眼瞼下垂が生じた。出産後無月経が続いたため某院産婦人科を受診し、高PRL血症(126.5 ng/ml)を指摘され、MRIを撮り当科に紹介された。テルグリドが開始されていたが、血清PRLは82.4 mg/mlであった。MRIではトルコ鞍内に限局する主にcysticなtumorを認めた。カベルゴリンに変更したところで妊娠。妊娠18Wの時、MRIを撮ったところ視交叉を挙上させる大き